

## 〈書評〉

費孝通著／小島晋治ほか訳

## 『中国農村の細密画』

—ある村の記録1935～1982』（研文出版）

（日中社会学会幹事）田辺 義明

本書は費孝通（Fei Hsiao-tung）博士による英文の社会学論文集『CHINESE VILLAGE CLOSE-UP』新世界出版社（北京）の邦文訳である。著者の費孝通博士（政治協商会議副主席、中国社会学会会長）については、述べるまでもなく現代中国を代表する社会学者・社会人類学者であり、その名も世界的に広く知られるところである。

中国において社会学という学問分野は、1952年の高等研究機関「調整」の後、事実上その活動が停止され、社会科学の戦列上からも抹消されていた。それが再開されたのは、1979年3月の全国哲学社会科学計画会議における、胡喬木による社会学の名誉回復宣言によってであった。このように新中国成立後における社会学の歴史には、大きな空白が存在している。

活動再開の後、近年に至って社会学の研究・教育活動は急速に活発化し、新たな研究業績も次々と生み出されている。それと共に、1950年代の社会学抹消以前における、論文や調査報告も復刻・公刊されるようになっており、先に我が国に翻訳・紹介された同じ著者による『生育制度』も本書と同様に、そのような経緯で再び世に出されたものである。

本書に見られるような、中国農村における記述的調査研究と社会問題への社会的取り組みが、なぜある時期に否定されたかは、まず直接的には1950年代当時のソ連社会科学会における社会学閉却の影響といえるものの、理論的には二つの理由が挙げられる。第一に費孝通博士らの研究は、唯一正当な指導理念とされる「歴史唯物論」に取って変わら

れるべきものであるとされ、社会学がブルジョア社会科学の下位類型の一つとして、不要な存在と決めつけられたこと。次に、革命闘争の勝利によって、階級的矛盾が解消されたならば、一切の社会問題は解決されると考えられていたことである。いうまでもなく、社会学の名誉回復後は、以上のような考えかたは誤りであったとされている。

著者は、解放以前から現在に至るまで一貫して社会学・社会人類学の立場から、中国社会の構造を観察し、とくに農村のそれについて調査・研究を繰り返してきた。自分の出身地である江蘇省呉江県のある村（開弦弓村）を、学名上「江村」と称して1936年以来、解放後の1957年、そして1980年と数次の記述的考察を行って来た。

調査対象地域としては、筆者自身の考え方によって「小さな社会単位に限定することが必要である。（中略）かといって、研究の単位は、あまり小さすぎてもいけない。」（25ページ）として、一つの村落とそれを取り巻く周辺地域に、それが限定されている。これはまさに、理論社会学でいうところのR. K. マートンによる「中範囲の理論（The Theory of Middle Range）」に符合するものであり、その点からは、この研究対象地域の設定は、理論上も妥当といえるであろう。ただし、事情が許さなかったとはいえ、80年代の調査を除いては、「組織」的な調査企画が組まれず、あくまでも個人的な記述や解釈に終わっている点は惜しまれる。

著者による諸研究は『PEASANT LIFE IN CHINA』以来、一連の「江村研究（江村経済）」として知られるところである。本書は、基本的に三つの部分から構成されており、それはおよそ20年づつのスパンをとった3次にわたる調査各回の記録から構成され、副題通り「ある村の記録」としてまとめ上げられたものである。

この「江村」研究から導き出された農村地域の経済発展の方策——農村への副業・軽工業の導入

と、農村地域における中核的コミュニティの建設が、即ち現在取り沙汰されるどころの「小城镇」建設政策に連なるのである。従って、この「江村」研究は過去の農村の時代的変遷を跡付けたものではなく、中国農村の今後を展望する立脚点となっているともいえる。1957年の調査報告では、とくにその点が強調されており、当時既に農業余剰労働力の問題に著者が着目し、その他産業への転換策をこの地域において構想していたことが暗示されている。——それが、後に反右派闘争のさなか、筆者が「右派」学者のレイベリングを受ける結果となったのであるが——。なお近年の「江村」研究について、そこから「小城镇」建設政策に至るいきさつについては、張行端、谷炎「從『江村經濟』到小城镇研究——費孝通教授七訪江村隨行記」（『瞭望』1983年12期）に詳しい。

初回の調査を行った1936年については、本書の前半がそれに割かれており、そこは著者の姉がその村の経済的發展に尽力した土地でもあり、日本軍侵攻以前の旧中国の農村における村落の様相が子細に把えられている。まず内容以前の事柄として、その時代的背景に照らした時に、その記録には貴重としか形容できないものがある。さらに、その後の抗日戦争中に雲南省の農村地域を調査して著した論文集『禄村農田』においても、この「江村」との相対的な分析視座がはっきりと見られる。そのことは、この本書における調査研究の方法と結果を踏まえることが、費孝通博士による数々の農村調査、民族研究の解釈において、一つの前提となるといえるのである。

ここで精緻に記述されている中国農村における日常的「生活世界」の様相は、調査者自身による実地の参与的観察によってのみ得られるものである。また一方で、とかく生活者の目からは余りにも自明で、記録に値すべきかどうか迷いがちな社会的機能諸項目の判別について、著者は参与しながらも比較的外在化させた手法をとって、それら

をも克明に記述している。そこに著者が薰陶を受けたイギリス社会人類学の機能主義的伝統を見る思いがする。ただ訳者も認めているように、「もちろん大きな地域的多様性をもつ中国のことだから、この江南の一つの水郷の村の精細な描写、分析を以って、中国農村全体を代表させることはできない」（323ページ）のであるが……。

1980年代に入ってから「江村」研究は、社会学の再建にあたって、研究者養成のいわばOJT（実地研修）を行うというもので、それを促成するための調査基地として、この地域が選ばれたもので、その理由としては当然ながら、過去における研究資料の蓄積が重視されている。

今回日本版として刊行された本書は、中国で1983年に発行された英文の論文集『CHINESE VILLAGE CLOSE-UP』を邦訳したものであり、そのために中国語原文のニュアンスを再現するために、訳者諸氏による相当な努力がなされていることと思われる。可能な限り中国文の原典に遡及したとのことであるが、英文を経由しての転訳部分の多いことは誠に残念なことである。なお、本書第5部の第2論文、第3論文の中国版原文は、それぞれ「從『男多女少』現象看江村的婚姻和家庭問題」、「江村家庭結構和婆媳關係」の標題によって、中国社会科学院社会学研究所、江蘇省社会科学院社会学研究所、江蘇省社会学会の1982年編印になる『江村信息——江村社会調查文集』に収められていることを付記しよう。また194ページにある嚴復の『群学肆言』は、『群学肆言』が正しい。

本書における調査研究は中国農村についての、いわば「定点観測」の成果であり、この種の研究は、著者である費孝通博士以外になしえなかったものである。そのことから、これは中国農村「社会学」の精華というべき存在となっている。

（1985年12月刊，四六判，348頁，2500円）